詩編 60 編の黙想（2021 年 11 月 3 日東福岡教会祈祷会奨励　松見俊）

主はわが旗：神と共に闘う

この詩は救いを求める信仰共同体の祈りである。人生には様々な波乱がある。他者と共に生きる人間にとって「助け」は必要である。そのような中で、「人間の与える救いはむなしいものである」という言葉には頷ける。人は共にいてくださる神に信頼し、共に闘うときに敵対者に勝つことができる。

頭書の記述はダビデがアラムナハライム及びアラムゾバでエドム人と闘ったときとあるが、歴代誌上 18 章、サムエル記下 8 章に書かれているものである。ここでは敵の死者 1 万 2 千とあるが、歴代誌では敵の死者 1 万 8 千とあり、またエドムと闘ったのはサムエル記ではダビデ、歴代誌ではアブシャイ、本編ではヨアブとなっている。ヨアブとアブシャイは兄弟でダビデの将軍であり、ダビデも大将として戦ったのかも知れない。（戦争とダビデ王国の美化はやめよう）この戦争はダビデ時代の戦争で 2 年間にわたった。ナハライムは「二つの河」の意味でチグリス、ユーフラテスの両岸で、アッシリヤ、バビロンなどの大国を生み出した地域を指している。アラム人がダマスコ付近まで南下、侵入し、ゾバのアラムと呼ばれた。ダビデが北に向けて出兵した時、南の背後からエドムが攻撃してきたのである。挟み撃ちの危機である。私たちは人生の折々に危機的状況に陥る。

1. 神への嘆き（3〜5 節）

「神よ」と呼びかけ、あなたは「われらを突き放し、打ち破り、倒した」と叫んでいる。そして、破れたように見える神と信仰者らの絆が回復されるように、神に立ち帰る（回心を意味する təšōwbêb）ことができるようにと祈っている。敗戦の経験、北のアラム、南のエドムとの厳しい戦いは、あたかも大地震で大きな地割れができたように、神は大地（ʿereṣ）を震わせ、引き裂かれたように感じられた。その深い溝を癒してくださいと祈り願う。自分が立っている処が揺らぐ、あるいは、足がおぼつかない（悪酔い）ことは闘うどころか、まさに不安である。

2. 神は旗を立てられた（6 節）

6 節は新共同訳と異なる翻訳を採用したい。「あなたを恐れる者のために旗（nês）を掲げられました。彼らを「弓」の前に集めるためです」（ヴァイザー）。口語訳「あなたは弓の前から逃れた者を再び集めようとあなたの旗を立てられました」。青木澄十郎「汝は真理のために掲げんとして、旗を汝を畏るる者に与え給へり」（セラ）。NRSV、KJV も。怖気づいて敗走しそうになるイスラエルのただ中に、神は、民を集めて一致させ、士気を高める「旗」を立てて下さったと語る。欧米人は「バナー、旗」を大切にし、教会にも村にも飾る。共同体の一致のシンボルなのである。アマレクとの闘いで、「主はわが旗」（ヤハウエ　ニシ）と告白する出エジプト 17:15，16 の物語を思い出させる。神は旗を立てられるだけでなく、自ら「旗」である。

３．絶望の中でも神に頼る（7 節）

あなたの愛する人々(Your beloved, yədîdekā)をあなたの右手で救ってください (hōwōšî'āh Hifil, imp.) 敗戦の絶望の中にあっても神が彼らを捨てられたと感じるその時でさえ、いや、その時だからこそ信仰者は神に向かって祈るのである。「信仰の悩みがあらゆる悩みを克服する唯一の道となる。なるほど、嘆きは、民の運命についての失望を絶対にかくしていない。それでも神から離れることがないのである」（ヴァイザー　125 頁）

４．神の自己宣言（８～10 節）

8 節より突然神がイスラエルに土地を分配され、近隣諸国を支配させた故事が啓示のように述べられる。ヨルダン川の東の領地、ヨルダン川西岸のイスラエル本体の領地、さらに、死海の東岸モアブ、更に南のエドムの地が名指しされ、ユダの領地の西海岸に侵入してきたペリシテにも言及する。10 節は周辺国であるので、「わたしのたらい」、「わたしの履物」と多少蔑んだ表現をしており、ペリシテについては「わたしの叫びを響かせよう」とトーンダウンしている。これに対して、イスラエル本体は「兜」「采配」と称している。神と契約を結んだ民に、「神が喜び勇んで」イスラエルの民に「土地分配」されるという祝福の過去の歴史を回顧している。キリスト教会の場合は、十字架につけられ殺され、復活されたキリストが「記憶すべきお方」である。祝福の分配者である。キリストは喜び勇んで祝福、恵みを分配される。

５．神は共に出陣されないのか！（11～１２節）

包囲され、孤立した町とは具体的に何を意味しているのか？エドムへの先導者とはどのような状況を差しているのか？　ここで突然「わたし」が登場する。ヨアブあるいはアブシャイあるいはダビデの嘆きであろうか。指導者は孤独である！万軍の主としてイスラエルの民と共に出陣する神が出陣してくれないのかと嘆いている。

６　人間の与える救いは空しい（13～14 節）

12 節から再び「我ら」と複数形に戻り、嘆きの色調に戻る。詩人は、もう一度 3 節に戻るようにして、神に助けを求め、敵からの救出を願う。14 節の結論部分では、12 節の嘆きの余韻を受けて、神が出陣される時、その民も神と共に力を振るうことができると言う。神と共に歩む民、民と共に歩む神が敵対する者たちに勝利してくださることを確信することで詩は終わる。その文脈で、「人間の与える救いは空しい（wəšāw,悪しきもの、偽り、空しいというような意味)」と歌う。この言葉にも耳を傾けよう。